

正宗白鳥

漱石と柳村

漱石と柳村

ホトトギスという小雑誌あり、明星という小雑誌あり、
一つは醴酒あまざけの如く、一つはラムネの如し。どうせ滋養に
はならねど、いずれも特色のありて、小範圍の読者に珍
重せらる。この二者は全然相容れざる性質を有し、寄稿
家も読者も類を異にし、明星の後援者に上田敏先生あり、
ホトトギスの客將に夏目金之助先生あり、自から相對立
して、大学の講堂外に自己の面目を發揮せるは面白し、
而して世柳村先生の厚化粧の美文を知る者多けれど、漱

石先生の粉飾なき散文を知る者少く、学士敏の新体詩をちようちよう喋々する者あれど、学士金之助の俳句或は俳体詩は、文壇の批判に上らず。これ一人は百方社会に知らるるを勉め、一人は超然きよ毀誉褒貶ほうへんの外に遊ばんと勉むるの結果にて、両先生の処世法はこの一事によりても察せらる。偶々今月のホトトギスに漱石の「童謡」という俳体詩あり、明星に柳村の「燕の歌」と「出征」との翻訳の新体詩あり、各其の作風を知り、文才を察し、性質を偲ぶに足る者あれば、一二節を転載して比較せんか。

高山の鳥とぐら栖巢せうだちし兄鷹せうのごと、

身こそたゆまね憂愁に思は倦^{うん}じ、
 モゲル過ぎパロスの港船出して、
 雄^を誥^{たけ}ぶ夢ぞ逞^{ます}ましきあはれ丈夫^{らを}。

(出征の一節、ホセ、コリヤ、ド、エレディヤ)

源兵衛が 練馬村から 大根を

馬の脊につけ 御歳暮に 持て来てくれた。

源兵衛が 手拭でもて 股引の

埃をはたき 臺どこに 腰をおろしてる。(童謡の二

節)

共に文科大学にてシェークスピアを講ぜる人にして、

作風にかかる大なる差あり。エレディヤとか何とか、殊更に日本にあまり知れ渡らぬ作家を、我は顔に吹聴し、作中の固有名詞も、希臘ギリシヤ以太利イタリアそれぞれ原音で読み、決して重訳の疑を容れさせぬは敏先生特得どくとくの手腕。鄙びたる言葉、今様いまようの詞句は厭い玉い、古語を古語をと詮索し、決して「持って来てくれた」とか、「腰をおろしてる」などの語を用うることはない。文学評論をすれば、以太利西班牙希臘等の引用凄じく、翻訳をすれば、源氏や枕草子にでもありそうな艶麗の文字紙上に満つ。夏目先生は全くこれに反し、平凡の事実を平凡に飾り気なく写つ

すを喜び、「鳥栖巢だちし兄鷹のごと」などの廻りくどい語は大嫌いにて、其のホトトギス誌上の文章を見れば、さながら無学者の筆に成りし如く、時に冷々淡々白湯さゆを呑むが如きことあるも、決して理屈や、ぎょうぎようしい引例はない。

能ある鷹は爪を隠くす。知ったか振をする者に真に深く知れるはなし。さるに盲目千人の世の中は、頻りに横文字交りの文章を片々たる小雑誌に掲げ、西洋文学を鼻の先きにぶら下げる手合を、直ちに博学者と思ひ込み、

深く蔵して沈黙を守れる真正の学者を認むるの眼力なし。夏目先生の如き現代日本有数の英文学者なれど、赤門外幾人が窺い知れる。これを上田先生の赤門内の不評判に反して文壇に名声嘖々さくさくたるに比ぶれば、今更の如く社会の毀誉褒貶の当てにならぬことの知られて面白し。先生のハムレットの講義、文学科第一の聴物ききものにて、其の講義振りは、ぎょうぎょうしき評論や考証はなく、如何にも自分の味わって感じたることを正直に言いあらわすのみ。先生曰く「西洋の大文学者を西洋人と同じように解釈するはとても出来得べきことではない。諸君は自か

ら感じたる所のみを味わえばよい。西洋の批評家がかく
いったからとて、強いて其の通りに感じようと勉める必
要はないのだ。」さりとして一字一句の注意を怠ることな
く、決して粗雑の読みようはしない。文学論とても誰れ
かのように大風呂敷は広げねど、和漢文学も一通りは心
得、殊に俳句の巧なれば、其のなだらかの講義の自から
滑稽趣味を帯び、楽しく面白く聴きなさる。従つて聴者
甚だ多く、人望亦柳村の比にあらず。敏先生の「ロメオ
とデュリエト」は自分の博学の吹聴は盛なれど、講義振
りは蠟を噛むが如く、時としては一時間に、カッセル版

で五六枚を素読するに止まることあり。御自分では頻りに此処が巧妙なり、彼処が意味深遠なりといえど、学生は少しも同感の思いを起しようがない。従つて出席者甚少なく、この次に講ずるといふブラウニングは一層聴く価値ねうちがなからうとの噂。先生は語学の天才があつて、洋行もせぬ身に英仏独は更なり、伊太利語にも西班牙語すぺいんごにも通曉せりとて、知友間に評判されるは、名誉の事ならんが、言わずとももの所に、語学通を見せんとせらるるは、通人にも似合わぬ事。日常何気なき談話の中にも、屢々西洋語を見せびらかし、殊に吾々無学者の手前では一層

甚しいが、聴手の方ではあまりよい気持はしない。其の一例を挙げれば、先生曰わく「アストンの日本文学史の西鶴論を解するには、ダンテを原語で読み得ねばならぬ。西鶴論の結末の一句ムヤムヤムヤはダンテ中のムヤムヤから引用されたので、非常の名言だ」と。Xそのムヤムヤを解し得ねば、とてもアストンを読み得ざるべしと断念したるが、蓋し日本でアストンを味えるは敏先生只一人ならんか。

味噌の味噌臭き、学者の学者臭き、何れ上物じょうぶつでない

証拠。敏先生が「帝国文学」誌上に歐洲文学を論ぜし頃、同雑誌の關係者語つて曰く「上田も分りもしない伊太利語だとか、西班牙語だとかを臚列ろれつするのは悪い癖だ。内部から見ると可笑しいようだ」と。しかしこの広告のお蔭で、博学の譽を得たのであれば当人は何時までもこの癖は止められぬそうな。「フランチエスカ」劇や「新曲浦島」などについて批判を加えるのはよいとして、其の態度が如何にも、自分が作者よりも一段上手にいるようにうで気取り屋としては確かに嘲風の墨を摩している。若し自分で広告する程趣味性に富み、文芸の修養深ければ、

芝居でも小説でも理想通りに創作して、大に腕前を見せたらばよさそうに思われるれど、其処はお人よしの姉崎博士とは異なり、大の利口者なれば、うっかりボロを出さず、他人の作に横槍を入れる位で満足ていの体。かのひねくった翻訳の如きは、有り丈の脳味噌を絞り出して、一語一句大苦心の余に成ったのだが、人に向っては「あれは一晩で書いたので読み返えしもしないのだ」と自慢げに語り、全力を注がば、どれ程の名文が出来るかと思わしめるなど、江戸ツ児という者、こんなに虚栄心が強いものか。一体先生の江戸ツ児がりは田口卯吉氏の系統を引

いて、洒脱を粧い磊落らいらくを気取り、物事に拘泥する風をし玉えど、まだまだ内心はそれ程灰汁あくが脱けてもいない。其の証拠には、世間の毀誉を空吹く風と済ましている裏には、其の為に悩む所多く、Xのこの記事を読んでも「中々盛んで面白いですなあ」とお世辞笑いの一つ二つはし玉わんも、これは表面に過ぎぬのだ。長者に取入る魂胆また抜目なく、嘗て其の著「ダンテ」を萬年先生にデヂケートして後も、この人に対する態度は注意周到との噂がある。その江戸ツ児気取りも甚だ用意周到にて、東京外に一步も足踏み込まぬを以て任じ、田舎へ行くを、

さながら流し物にでもされるつもりでいる。此処に面白い一例は先頃横浜の某学校の依頼により、止むなく演説に出掛ける時、妻子に対し別離の情に堪えず、殆んど水杯をもしかねまじき有様にて、一度門口に出た後、再び後戻りして妻君と愛女瑠璃子嬢の顔をつくづくと眺め、涙ぐんで出られたそうである。これでは歐洲留学を命ぜられたらば、どんなであろうと思われるが、元々出世の手段を見のがしてまで江戸ッ児振る程悟ってもいまいから心配無し、海のかなたの趣味に感染して、独逸や巴里は陳腐で、大向うも喝采すまいから、一つナポリーかべ

ネチアの通人になり済まして痴者^{こけ}おどかしをなされることであろう。江戸ッ児が伊太利ッ児に早がわりの芸当を早く見たいもの。

上田先生曰わく「大学なんてほんとに下らない所です、学生も駄目だし制度もよろしくない。僕は大嫌いです」と口癖のように外に向うていわるるそうだが、それ程いやな大学の講師に何故なられたのであろう。若しおれの方で少しでも大学の光彩を加えて見ようという気込があるのなら、今のような上皮すべりの講義では何の効能も

なかりうし、長者の鼻息を伺うようでは、将来も頼もしくはない方だ。其処は夏目先生の方が却って悟っている。てんで大学教授や文学博士などを尊たつとき物とも思わねば、其の地位に上ろうとも勉めない。「教師などになりたくはないが、食う為に止やむを得ぬのだ」という主義を正直に奉じ、世間の事業とか名利とかを殆んど念頭に浮べていない。大塚博士と仲がよいのも自おのずから性質が似ているからであろう。先生多く人に接するを好まず、自分の好きな書物を道楽に読んで静かに日を送ること多く。又気の向いた時は夜一時までも、二時までも筆を執

りて、随感を写つし、俳句等を作ることあり。一体嗜好よりいえば、教師よりも文士として毎日誰れにも累わされず勝手な事を書く方がよいのだが、生活上望通りにならぬと自白している。先生のかく覇気とか野心とかいう者を持たぬのは、一は俳句趣味の修養に由り、一は身体るいじやくの羸弱るいじやくによるといふ者あり。其の日常の生活はホトトギス誌上の「我われは猫である」といふ一文によりても、一斑を窺い得べく、久しい間神経性胃弱で、外界の騒がしき刺激に堪えず、可成世なるべくを離れて気楽に暮らさんとするのが、終生の目的従つて人の訪問をも喜ばず、いやな奴

が来て、長座をすると、終に堪え得られなくなって、露骨に「君は帰って呉れ玉え」といい引留言葉などついでいいし事なし。其の代り自分の好きな人となると何時までも語り合い、高濱虚子なぞとは、差向いで首を傾^{かし}げ、俳句俳体詩に徹夜することもありという。美的生活とか文芸尊崇説などを仰山らしく唱うるの愚は演ぜねど、自箇一身は沈黙の中に美術文学を深く味い余財なき身を以て近時の出版物を購い、絵画についても鑑賞力に富み、姉崎上田両先生に一步も劣らぬのみかこれ見よがしに意見^見を吐き出さぬ丈でも、胸に蓄うる所一層多からんと思

わる、こんな風であれば、長上に愛せられようと勉めもせねど、憎まれもせず、学生に敬われようともせねど、嫌われもせず、羨ましき生涯なり、先生も元から今の如く大悟せしにあらず、熊本の高等学校にありし際は随分学生を苦めて得意顔せし事もあったそうなの。

日本文学電子図書館

漱石と柳村

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第6巻、新潮社

昭和40年8月25日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館